

第27回里山一斉調査報告

常俊 容子 (スタッフ)

春恒例の保全協会主催行事、第27回「里山一斉調査～観察しながらウォーキング」は、4月12日12コース、19日2コースで実施し、両日とも天候に恵まれ(コース名は確認表参照)延べ270名(うち小学生以下29名)が参加しました。

毎年同時期に、ほぼ定点でフェノロジー(生物暦)を確認するわけですが、一見脆弱に思えるような場所で今年もカミサシウオが確認できた四條畷・田原の里山のように、いつものお馴染みに無事再会できたコースもあれば、砂防ダムができてコースを変更した高槻、「彩都」隣接地で特定外来種ナルトサワギクの広範な分布がみられた茨木、泉南・畦の谷では旧緑資源公社の事業である基幹農道が通り、緑地が分断された影響か調査開始以来今回初めてノウサギ、リスのサインが全く確認できなかったなど、開発による負の影響が伺われる地域もありました。

逆に、人の関与が希薄になり、地域独自の生物多様性の劣化が懸念される里山においては、耕作放棄地の増加や放置竹林の拡大の影響か、イノシシは箕面、堺、泉南、河内天見など複数地域で増加。八尾・高安山では、ミミズ、サワガニがいなくなったとの報告がありました(大阪府域の耕地面積は1,486ha(17.6%)減少、耕作放棄地面積は292ha(20.8%)増加(農林業センサス:平成12~17年))。ランドサットデータ利用による平成16年度竹林面積は1,784ha、昭和60年~平成13年で少なくとも約1.2倍に拡大)。ちなみに「生駒山系はイノブタ」説が根強くありますが、大阪府環境農林水産総合研究所の解析では、交配されたヨーロッパ種のブタDNAは検出されていないことから「現時点でイノブタは確認されない」というのが公式見解です。

一方で能勢:今までになく、ブナ林、コナラ林がところどころ手入れされ、林床が明るくなっている、堺:草刈りの影響か川床にカワナが増え、今後ホテルに期待、和泉・松尾寺:谷津田で利用されている場所もあり、

竹林などところどころ手入れされている、などの報告もありました。

枚方・穂谷は保全協会も協力しているモニタリングサイト1000(環境省)の里地里山のコアサイトですが(他に今回調査のコースでは池田・五月山で五月山グリーンエコー、橋本・玉川峡では玉川峡を守る会がモニタリングサイト1000に参加)、最近「にほんの里100選」(朝日新聞主催)に選定され(他、大阪では能勢町長谷)注目度が上がり訪問者が増加、その影響か、消えたと思われる植物もあり、把握出来ない情報の伝播で最悪の場合に盗掘につながるおそれがあるという事情で、今回から本コースについては報告書にマップは掲載しないことになりました。

シカの現況確認が主目的の能勢町・天王では一斉開花後の枯死樫もほぼ倒伏したチマキザサも年々消失し、林床が見渡せて不法投棄のゴミが目立つようになり、シカの採食によって林床が空いている状況は池田・五月山、箕面、高槻でも同様です。

府下では早くから当地で確認されているソウシチョウが同じ藪生のウグイスより賑やかにさえずり、音量で確認する限り繁殖している様子が伺えました。藪の上層を利用することで中層に営巣するウグイスと棲み分けているともいわれますが、「日本の侵略的外来種ワースト100」(2004年生態学会選定)にもあげられている特定外来生物です。



カミサシウオの卵塊を観察(箕面・才が原コース)



